

## 那須章彌氏を悼む

那須氏の死は我が技術界  
の一大ショックである

五月三日の各新聞は、何れも四段抜初號見出しで、川崎鐵網工場の前技師長那須章彌氏の自殺を報じた。日常餘りに多くの自殺記事を讀まされて好い加減それに対して無感覺になつてある我々ではあるが、紙面に柔和な那須氏の面影を見出した時、さうして『那須章彌』の活字に目を觸れた時愕然として爲すところを知らなかつたのである。昨年頃から、氏が献身的に活動されてゐた川崎工場との間が、うまく行かなくなつた事を聞き、其事業と離別せればならぬ事は、恐らく氏にとつては生命との別離と同意義なものがあらうとは誰も考へた處であるが、今日を豫想するものは誰もなかつたのである。

○

那須章彌氏の自殺は最近の一大ショックである。中年働き盛り、我國の代表的技術家の一人としての那須氏を今失ふ事は惜みても惜みても尙餘りある事で、然も自殺と云ふ最後に對し我等は悲痛極まりない感にうたれる。

何んな事情があつたにせよ、若し運命が自殺に誘つたのだとすれば、運命は餘りに正義の力を無視してゐるのではないか。自殺しなければならぬ公人は他に幾らもある筈だ。

技術家には一般に世間知らずの人が多いと云はれる、或は社會常識に欠けてゐる人が多いと云はれる。或は融通の利かない人が多いと云はれる。或はそうかも知れない、然しそれは一方から見れば悪すれがしない事である。權謀術策を事としないからでもある。技

術家としてはそれで結構ではないか、技術家が總て市會議員や衆議員の眞似をしてゐたら、技術の眞の發達は到底望まれないのだ。

現在非常時と稱せらるゝ我日本に於て自ら國家の捨石を以て任ずる志士が多く現はれてゐる。そう言ふ人々に對し我々は多大の敬意を表する、然し我々技術家仲間には於ては自ら挺身職務の爲に倒れたとて國家は何を以て酬ゆるであらうか、其所には酬ひられる何物もないではないか。

那須氏は明治三十八年に東京帝大土木科を卒業したのであるから共同窓には現在著名な人が多い、先づ現鐵道次官久保田敬一氏を始め鐵道省方面では前建設局長中村謙一男や、前工務局長後藤佐彦氏や、同じく局長で青島に出張してゐた加賀山學氏や、工務局改良課から突然安田財閥の理事に轉身した丹治經三氏や、民間では臺灣電力の建設部長新井榮吉博士や横河橋梁製作所の取締役江橋貞二氏等である。

先年復興局の土木部長たりし大田圓三氏の自殺あり、一昨年は東大教授の井上範博士の自殺あり、今回また那須氏の事あり然も雜誌人としての我々に取つて皆相當縁故の深い人ばかりであつた。

技術家がが技術以外の問題に觸れると、兎角煩悶の種を招く様である。勿論技術家と雖も社會人として生存してゐる以上は技術以外の問題に全然觸れないと言ふわけには行かない。多く觸れる人もあり、餘り觸れない人もある。境遇により、性格により各異つてはゐるが、要するに技術家に對し其専門以外の交渉に多く當らしむると言ふ事は適當な事ではない、即ちそれは人生の常道ではない、常道でないから誤が起り易い、如何なる理由があつたにせよ那須氏の如き正義觀念の強い立派な技術家を自殺せしむると言ふ事は社會の大なる缺陷であり、社會の罪ではあるまいか。

技術家本來の那須氏は決して自殺などすべき人ではない、明朗にして偉大なる仕事を、

もつと々々成し遂げたであらう。

那須氏は曾て鐵道協會の南畫會に入つてゐたので、私は或會合の席上で南畫會と同時に設けられた禪話會へも入つたらと勧めた事があつた、其時那須氏は『精神の修養などと言ふものは一生涯やつても出来るものではない』と幾らか冷笑的に言つてゐた事があつた、私は其時幾らか不思議に思つた、技術家としては各方面の多くの團體に盡力しつつ、然も川崎工場をあれ丈けに隆盛にした那須氏が、南畫に趣味をもつ位の餘裕を有し乍ら、禪話會を冷笑する態度を不思議に思つた。其後我々も多忙であり、時に那須氏と會する事はあつても其問題はそれ以上に觸れなかつた。然し若し那須氏が南畫の上にもう一步進めて禪話會を顧みる丈け餘裕を有してゐたならば、或ひは今回の自殺はなかつた事と思ふ。

然し那須氏は技術家としては抜群の仕事をした人である。其點から言ふと五十六歳の人生は決して短い方ではない。明治年間の官尊民卑の遺風の中にあつて、若くして海軍技師を捨て、民間の小工場川崎鐵網に入り、其所に二十餘年間孜々として一日の如く精勵した。技術家としての氏の計畫、設計、宣傳等悉く當を得て、鐵網の技術的用途は素晴らしい發展を遂げた。之は單に一川崎工場の異常なる繁榮を來したのみならず、日本の工事技術界に効獻した點も偉大なるものであつた。其間に學會、研究會、其他の公共團體に對し、異常なる盡力をされ技術家としては珍らしく多方面に活躍したものである。

特に先年建築士法が建築技術家に依つて唱道せらるゝや、之に對して那須氏は土木士法の必要を叫び率先して斯界に奔走しつつあつた。氏が個人の利害を離れて常に公益の爲に奮闘努力してゐた事は之を以ても知られる。那須氏が永い實業生活にも拘はらず、自個の蓄財などは殆んど念頭になかつた様だ、二十餘年間常に川崎工場の爲に否寧ろ日本の技術界の爲に、公益の爲に一心不亂に働いてゐた事が能く伺はれる。



那 須 章 彌 氏

先年内村鑑三氏は廣井勇博士が逝かれた時博士の住居を指して、日本の一流土木家の住宅として、廣井博士が如何に清廉であつたかを稱へられたが、今又那須氏に對しても同様の意味の言葉が言へると思ふ。

二十餘年間殆んど自分の生命として育てあけて來た川崎工場に突然離別しなければならぬと言ふ事は全く氏に取つては致命的な打撃であつたに相異ない。新聞で見ると退職手當五萬圓の請求が納れられなかつたと傳へられてゐるが、之は五萬圓とか十萬圓とかの問題ではなく、實に技術家が民間に於て献身的に働き得るか否かと言ふ問題に對する大なる謎ではあるまいか。

死後何等の遺書もなく那須氏の死はかくて大なる謎を我等に残したものである。

筆を擱いて那須氏の寫眞を見れば、何事をか技術界に呼びかけてゐるかの様である。

(五月十日一記者)